

Fukuda Heihachiro: A Retrospective

50没後
年

2024.3/9 sat-5/6 ^[holiday] mon

福田平八郎



《素描（うす水）》

昭和24年（1949）

大分県立美術館

Press Release

【開催趣旨】

本展は日本画家・福田平八郎（明治25年〔1892〕～昭和49年〔1974〕）の没後50年の節目に開催する大規模な回顧展です。大分市に生まれ、大正から昭和にかけて京都で活躍した平八郎は、近代日本画の新境地を拓いたとされる《漣》^{きざなみ}（重要文化財、大阪中之島美術館蔵）をはじめ、色や形、視点や構成に工夫を凝らした数々の作品を発表し、独自の芸術を確立しました。

関西で17年ぶりの回顧展となる本展では、《漣》や《竹》（京都国立近代美術館蔵）、《雨》（東京国立近代美術館蔵）などの代表作を含む、初期から晩年までの優品を一堂に展示し、平八郎の画業を広く紹介します。また、《漣》に代表される、平八郎が幾度となく挑戦した水の表現に注目した特集展示や、「写生狂」を自称した平八郎が描いたスケッチや素描の数々を大分県立美術館の充実したコレクションにより展覧し、創作のプロセスや、彼が目指したものに迫ります。

モダンで、カラフルで、研ぎ澄まされていながら、チャーミングで親しみやすい平八郎の作品は、現代の私たちにも新鮮な驚きと感動を与えてくれるでしょう。

【見どころ】

1 関西では17年ぶり、大阪の美術館では初の回顧展

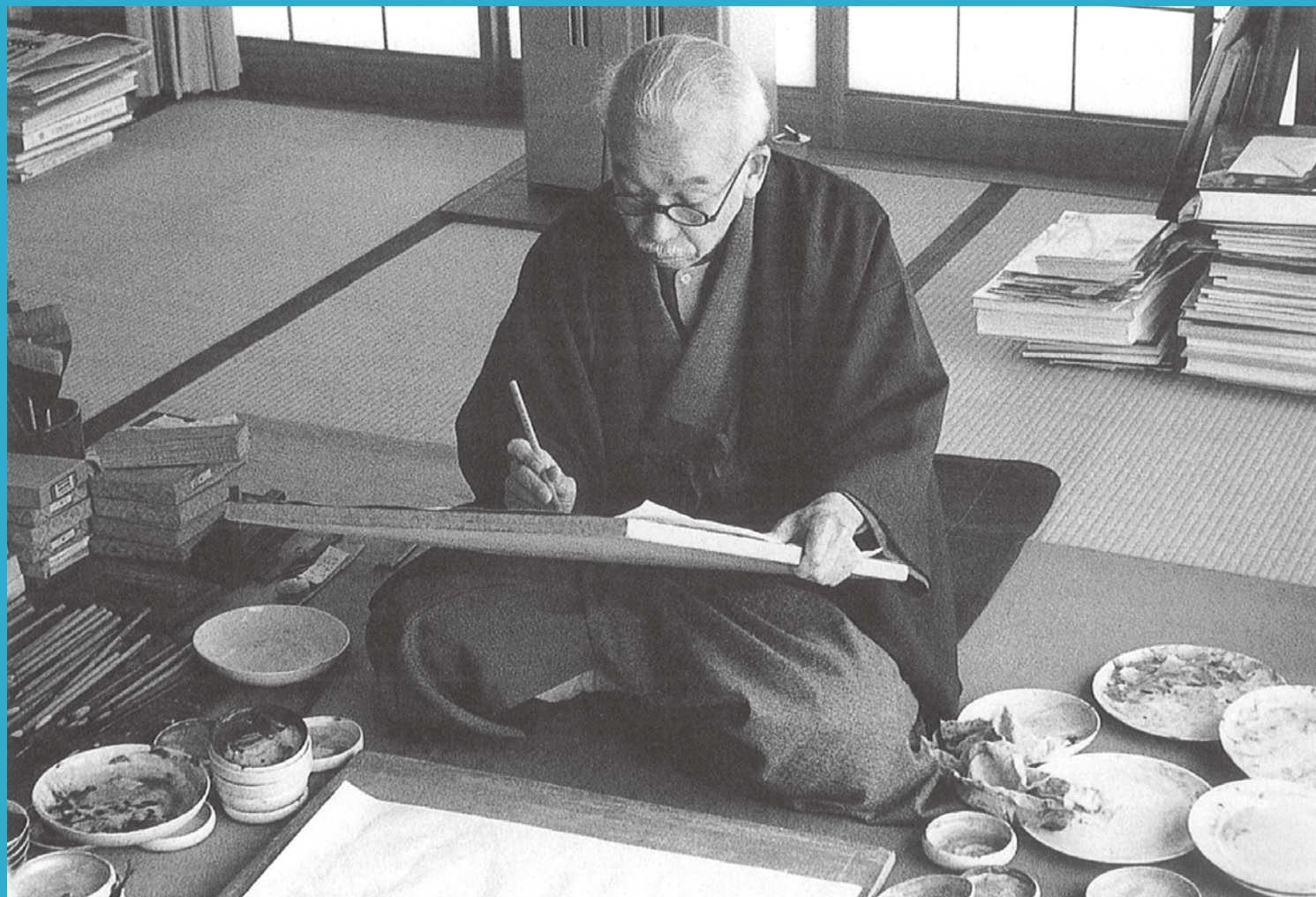
2 大阪中之島美術館では初めての日本画家の回顧展

3 初期から晩年まで、画業を一望する**120件以上**を展示

4 重要文化財《漣》をはじめ《竹》（京都国立近代美術館蔵）、
《雨》（東京国立近代美術館蔵）など**代表作が集結**

5 大分県立美術館以外では**初めての公開**となる《雲》（大分県立美術館蔵）が登場

6 画家の瑞々しい感動を伝える**写生帖**や**素描**も多数紹介



【福田平八郎略歴】

福田平八郎は、明治25年(1892)2月28日、大分市に父・馬太郎、母・アン(安)の長男として生まれました。18歳のとき、**苦手の数学**で旧制大分中学校3年の留年が決まったことから**画家の道を志し京都**へ出ました。

京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校で学びながら文展に出品をつづけていた平八郎ですが、転機を迎えたのは卒業後の大正10年(1921)、**第3回帝展に出品した《鯉》が特選**をえた上に宮内省買い上げとなり、若くして京都画壇の寵児となりました。このとき「画家として一人前になってから」と保留にされていた谷口テイトとの結婚を許されたため、**鯉を描いて恋を得た**と話題になったそうです。

そして昭和7年(1932)には第13回帝展に**《漣》**を出品します。当時はそのあまりの斬新さに**賛否両論**が巻き起こり、浴衣の模様のようなといった批判も起こりましたが、後に平八郎の画風の特徴を示す**代表作**とされ、平成28年(2016)には**重要文化財**に指定されています。

戦後も新しい表現に挑戦し活躍をつづけるなか、昭和36年に**文化勲章**を受章し、**大分市の第1号名誉市民**にもなりました。この年を最後に官展への出品を止め、以後は画廊や百貨店の主催する小展覧会に自由な作品を発表するようになりました。

昭和49年3月8日に国立京都病院に入院、同月22日に気管支肺炎のため82歳でこの世を去りました。そのお墓は、京都鹿ヶ谷・法然院と大分市・西応寺にあります。

第1章 手探りの時代 (1918)

「画塾というものが、
なんとなく私の気分に添わぬ感じがしたので、遂に入らなかった。
今日からみて、これが為に大変遠い道を歩いて来たようにも思えるが、
一面それ故に、私は私なりの好きな道を歩いて来たようにも思われる」

「大正の頃」『日本美術』第2巻5号 昭和18年5月

明治43年(1910)に同郷の日本画家・
たかくらかんがい
高倉観崖の紹介状を携えて上洛した平
八郎は、翌年、京都市立美術工芸学
校に入学し、大正4年(1915)からは
京都市立絵画専門学校(絵専)で学ぶ。
早くから才能を発揮したが、同級生の
岡本神草から「もっと対象を苦しんでと
らえるべきだ。本当の君の絵を描くべき
だ」と忠告され、絵専の卒業制作を一
時中断したエピソードが残る。学生時
代から卒業後間もないこの時代の作品
は、熱心な研究の結果、知らぬ間に他
の画家の描き方に倣っており、高い技
術力の一方で、国画創作協会の画家た
ちや、中国宋元の院体花鳥画の影響
がみられる。

*会期中、展示替えがあります
*章のタイトルは仮題です

《犬児》

大正3年(1914)
京都国立近代美術館

生まれ故郷に因んだ「九州」と
いう号で制作していた学生時
代の作品。「平八郎」を号とす
るまでに「素仙」、「馬安」、「馬
平安」なども使用している。





《雨後》

大正4年(1915)
京都市立芸術大学芸術資料館

白い花を咲かせ、しだれる萩を少ない色数で大画面に描く。散った花弁、水分を含んだ葉などに観察のあとがみられる。京都市立美術工芸学校の卒業制作で、同校の買上げとなった。

トピック1

一本名で通す！ 自然体の人

平八郎ははじめ「九州」などの雅号を用いた時期もありましたが、やがて本名を使うようになり、それを生涯通しました。「凡人」であることを心がけ自然体でいることに努めた平八郎の人となりが表れているようです。

「人間は凡人になるほど落ち着くようだ、
俺らは、画にこそ多少自信はあつても、
どだい凡人であることを^{よろこ}欣んでゐる、
ところが、うつかりしていると、
その凡人が、いつの間にか凡人ばなれがして、
少しえらさうな気持になつてゐることがある、
それをぐいと凡人にしてくれるのは魚釣りだ、
魚釣りほど人間を凡人境に突き入れて、
人間らしい人間に還元してくれるものはない」

《夜桜》

大正7年(1918)
大分県立美術館



第2章

画壇の寵児へ

(1928)

「自然の隅から隅迄、
出来る限り微細に探求し分析して行って、
そうした態度によってのみ此大自然は解決されると思はれた」

「美の遍路一支那に行く気持」『美の国』第4巻第4号 昭和3年4月

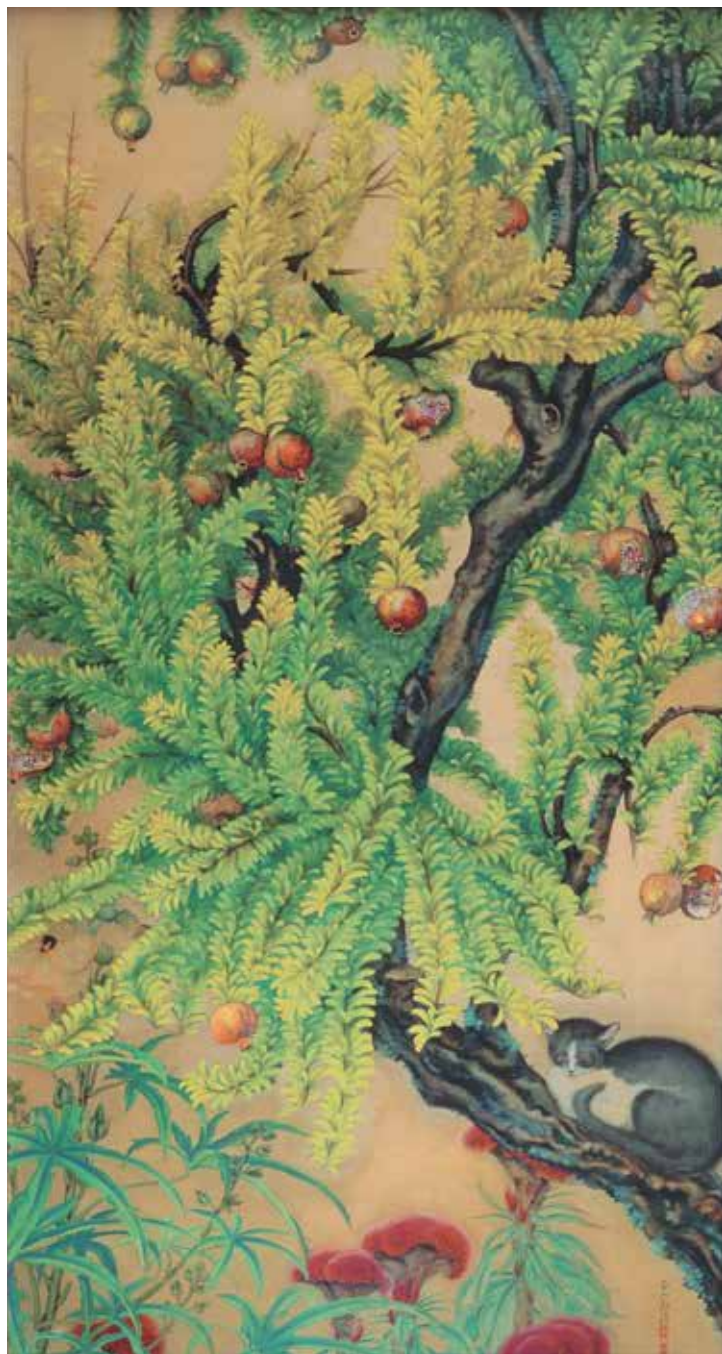
京都市立絵画専門学校の先生である中井宗太郎の助言に従い「自然に直面して」「客観的に見つめる」ことで、平八郎には手探りの時代を脱する兆しがみられるようになる。卒業後の大正8年(1919)、第1回帝展に《雪》が初入選し、翌年第2回展に《安石榴》が入選、大正10年の第3回展では《鯉》が特選となり宮内省買い上げとなるなど、入念な観察に基づく写生を重視した新しい表現が評価され、京都画壇の新星として注目されるようになる。そして、大正15年の《朝顔》では古典様式の模倣から脱却し、写実に基づいた新たな表現様式を生み出そうとするなど、独自色が表れはじめる。

トピック2

—ものをよくよく見て描く!

学校時代、平八郎は級友の岡本神草から、諸先輩の技巧に倣って制作していることを指摘され、相談した美術史家の中井宗太郎の言葉をヒントに、客観的な見方の追究をはじめます。ここから、類い稀な眼を持つ画家、平八郎の美の発見の歴史がスタートしたのでした。

*会期中、展示替えがあります
*章のタイトルは仮題です



《安石榴》
大正9年(1920)
大分県立美術館

勢いよく伸びる枝、生命感あふれる安石榴の果実など、自然の力を絵として整理せず、そのまま表現している。当時流行していた中国宋元院体画を意識した作品。



ゆうり
《游鯉》
大正10年(1921)

平八郎は南禅寺の境内の池を泳いでいた鯉を見て描きたくなったという。その後、あちこちで鯉を観察。本作で描かれる水中で群れる鯉も入念な観察に基づく。



《朝顔》
大正15年(1926)
大分県立美術館

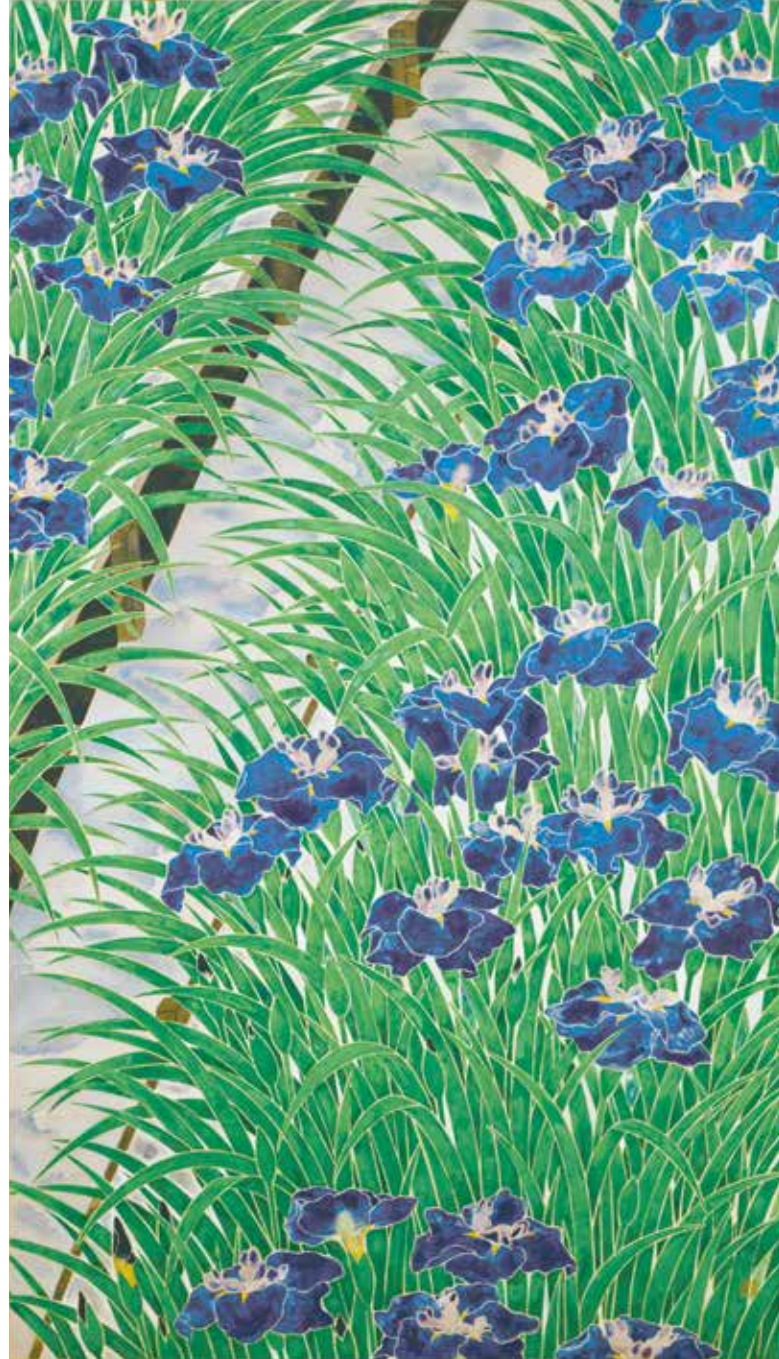
横一列に並び、竿に絡みながら上へと伸びる朝顔。蕾から開花まで、様々な花の状態を丁寧に観察して描く。古典作品の模倣ではなく、自己の表現を手に入れ始めた頃の作品。

第3章

鮮やかな転換 (1944)

「結局よく見ることが何よりのたよりとなるものです」

「自作回想(漣)」『三彩』臨時増刊第99号 昭和33年4月



はせがわ ちろう
《花菖蒲》

昭和9年(1934)
京都国立近代美術館

画面を斜めに横切る水路を挟んで、色鮮やかな花を咲かせる菖蒲を描く。色の変化や交響、複雑な色の配列など、平八郎の関心が色彩へと向かう中で制作された作品。

写生を進めるなかで、平八郎は花や鳥の微細な部分にまで関心を抱くようになる。そうしたなか、昭和3年(1928)の中国旅行で「自然の大花鳥」に接したことで、細部を超越して全体の雰囲気や自然の生き生きとした生命感を表現することの重要性に気づき、観念的ではなく直感的に自然と向き合うようになる。そして、「写生の対象から、(中略)形や線よりも先に色彩を強く感じ」た平八郎は、色彩を追求することで対象の形を捉えるようになる。こうして平八郎の作風は「写生を基本にした装飾画」へと発展していく。

*会期中、展示替えがあります *章のタイトルは仮題です

《鴨》

昭和10年(1935)頃
大分県立美術館

のんびりと泳ぐつがいの鴨は、全く陰影をつけずに明るい色のみで表現されている。楕円形が浮かぶ水の表現や、水面に揺れる鴨の影など、水の揺らぎへの関心がみられる。



トピック3

—かつてない「色」を描く！

とってもカラフルな竹藪も平八郎による「見ること」の探究の成果でした。

「昔から竹は緑青で描くものときまってるが、
3年間見続けて来てるけど
私にはまだどうしても竹が緑青に見えない」

「初夏の写生」(神崎憲一記)「隻語拾輯録」『国画』第2巻第9号 昭和17年9月



《竹》

昭和17年(1942)
京都国立近代美術館

戦時中、竹藪の写生に没頭した平八郎は、竹の幹の色合いや太さは成長とともに変わること気づいた。自身の目で捉えた色で竹を表現した意欲的な作品。

*会期中、展示替えがあります
*章のタイトルは仮題です

「この頃ではもう

装飾的になっても写実になっても
かまわんと思っっている。

問題は内容だ」

「文化勲章の人々(1)」「朝日新聞」昭和36年10月20日

トピック4

—絶妙なトリミング。 かつてない「構図」で描く!

ぽつぽつと、瓦に落ちては消える雨の様子が生きものの足跡のように思えて心を打たれたのがきっかけで生まれたという作品。大胆なクローズアップとトリミングで構成された強固な瓦に、雨粒がはかなくも豊かな表情をみせています。



第4章 自然の美をうたいあげる (1945)

趣味の釣りを通して「よく見ること」と「凡人であること」の大切さを学んだ平八郎は、日常への温かいまなざしと、自然を捉える斬新な視点によって、人々を魅了する作品を描いた。描く対象は、花鳥や魚にとどまらず、蛤や乾燥した鱧の鱗、折り紙やガムの包み紙、さらには水や氷、雪、雲などの自然現象にまで及ぶ。平八郎は人々が日常目に見ているものを、誰もが見たことのない視点から捉える自由な発想で表現をつづけた。

《雨》

昭和28年(1953)
東京国立近代美術館



《雲》
昭和25年(1950)
大分県立美術館

鮮やかな青い空に湧き上がる白い雲を描く。青空は濃淡や筆致が抑えられており、雲にも陰影はみられないなど、写生に基づきながらも要素を極限まで削ぎ落とした表現となっている。



《花の習作》
昭和36年(1961)
京都国立近代美術館

池のほとりで力強く育つ菖蒲と、舞い散った桜が重なりあう様を描く。自身の感性で捉えた情景を豊かな色彩で表現しており、季節の移り変わりを感じられる。

「われわれの感性と言うものは、
環境や教養の力で、
年を追うて成長して往くものであるから、
同じ対象でも絶えず写生するのがよい」

「私の写生帖1」[三彩]第34号 昭和24年9月

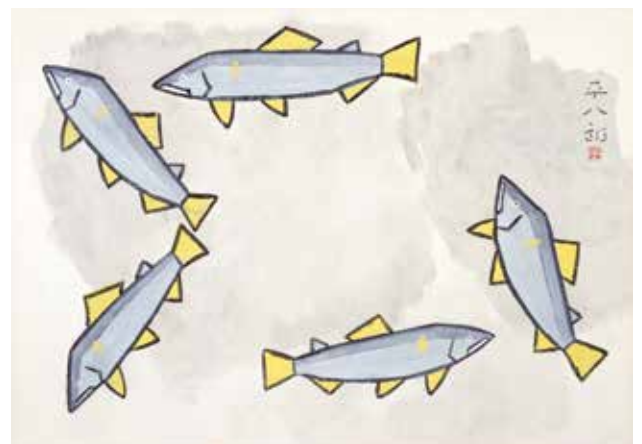
トピック5

— 同じモチーフを何度も描く！

鯉、鮎、竹など、平八郎は生涯を通じて同じモチーフを繰り返し描いています。並べて見ると画風の変化もよく分かります。



《鮎》
昭和25年(1950)
京都国立近代美術館



《游鮎》
昭和40年(1965)
大分県立美術館

特集 水の探究——重要文化財《漣》を中心に

昭和7年（1932）、琵琶湖の湖北で釣りをしていた平八郎は、不漁のため浮きをならむ目を水面に移したところ、水面が微風によって漣をたてて美しい動きをみせることに気がつき、その瞬間「これを絵にしてみよう」と思ったという。こうして誕生したのが《漣》である。モチーフや色彩を限定した簡潔な構成はリズム感に富み、抽象絵画とも見紛う音楽的な美しい画面をつくりだした。日本画の装飾的伝統に自然観察による写実を融合した本傑作は、近代日本画の新境地と高く評されている。



展覧会では、《漣》をはじめ、平八郎が幾度も追究した「水」の表現に注目し、関連作品などを特集して展示する予定です。

《漣》重要文化財 昭和7年（1932） 大阪中之島美術館

発表当初は【問題作】

第13回帝展に出品され、一番の問題作だと話題になりました。今振り返っても日本画史上ほかに例がないほど大胆な新作の発表だったと言えるでしょう。

光の効果を生み出す【下地】

銀箔に見える地はプラチナ箔で、その下には金箔が貼られています。金の上に銀色を重ねることで、柔らかく反射する光の表現が生まれました。

【トリミング】どこがベスト？

水面のスケッチを収めた写生帖に、ハガキの中央部分をくり抜いた手製の枠が挟まれていました。トリミングに試行錯誤する様子が見えます。



《写生帖（漣）》より 昭和7年（1932） 大分県立美術館



大阪中之島美術館
主任学芸員 林野雅人

【大阪中之島美術館 担当学芸員に聞きました。】

Q 大阪中之島美術館で
福田平八郎展を開催する理由は？

A 当館が所蔵する《漣》(重要文化財)を新しい美術館で紹介するにあたり、作品が福田平八郎の画業の中でどういう位置づけなのか検証し、展覧会という形で提示したいと考えたからです。

Q 《漣》収蔵のきっかけは？

A 《漣》は近代日本画における新しい境地を開拓した記念碑的作品であり、近現代美術を扱う当館としては是非ともコレクションに加えたかった作品でした。ご縁があり平成5年(1993)に収蔵できました。

Q 本展での目玉作品は？

A ひとつは、近年修復が完了した《雲》です。本作は、所蔵する大分県立美術館以外では初めての公開となります。夏の青空に立ち上る真っ白な入道雲。グラフィックのように見えますが、実際には微妙に異なる色面により構成されている作品で、是非とも実物を見ていただきたいです。また、平八郎がなぜこの作品を描いたのか、彼の画業を概観する展覧会に出展することで、その理由が浮き彫りになると考えています。

もう一点は《漣》です。展覧会では本作が誕生した経緯を特集して紹介します。平八郎がなぜ水の表現に魅せられたのか、どのように水を表現してきたのか、水を描いた他の作品や素描、下絵などにより探究します。

Q これまでの回顧展との違いは？
この展覧会で提示する新たな視点は？

A 関西では前回開催されてから17年ぶりの開催となりますが、代表作を可能な限り集めて紹介します。新たに見つかった作品や修復等により出品が可能になった作品もあります。

平八郎の作品には、場面を巧妙にトリミングしたものがたくさんあります。近年スマートフォン等で写真撮影は広く浸透し、誰もがトリミングを日常的に行っています。今の時代に平八郎の作品を見ることで、構図の斬新さや色彩の美しさ、背景処理の仕方など、身近に感じてもらえるのではないかと思います。自然と直感的に向き合い、そこから必要な要素を絞り込み画面に表現する平八郎の美の世界観は、現代においても新鮮な印象を与えるのではないかと考えています。

Q 展覧会を見るにあたってのアドバイスを

A 固定観念に縛られずに、自由に作品と対峙し、純粹に平八郎の世界を楽しんでみてください。

例えば、平八郎の作品のなかには、カラフルに塗られた竹や花、鳥などが描かれています。これは作者の目のフィルターを通してしっかりと観察した結果生まれたもので、一見同じに見えるものにも、様々な違いがあり、平八郎にはこのように見えたのです。また平八郎は、日常見過ごしがちな、水や雨、雪などが作り出す自然の表情を絶妙な構図でトリミングし、一枚の絵に表現しています。

つまり、この展覧会は一般的な日本画展とは少し作品の傾向が違いますので、まずはご自身の目で見て楽しんでください。

平八郎芸術、創造の秘密

瑞々しい感動をとじこめた「写生」

「写生狂」を自称した平八郎は、どこへ行くときでも必ず写生帖を持って出かけたそうで、そこからは、水の動きや竹の色など、平八郎がその時々を感じ入ったものを繰り返し描いた様子が見てとれます。そして素描（主に画室で1枚の紙にモチーフを写生したもの）には、紙テープなどユニークな題材への挑戦や構図の工夫が見られます。数多くの斬新な作品が誕生した背景には、こういった膨大かつ多様な写生への取り組みがありました。本展では、目にも鮮やかな平八郎の写生帖や素描を本画と合わせて紹介し、天才と言われた画家の創作の秘密に迫ります。

《素描（柿紅葉）》

昭和24年（1949）
大分県立美術館



《素描（紙テープ）》

昭和30-40年代
大分県立美術館



《素描（烏瓜、海芋）》

昭和10年代
大分県立美術館

「常に全力を注いでの未知数でありたい写生は、
全部が自分のもので其の間に於て極く僅かな発見が貴く、
この蓄積が個性を伸ばすのに大いに役立つものと思います」

「私の写生—花鳥—」『三彩』第42号 昭和25年5月

《素描（模写・児童画展）》

昭和40年（1965）
大分県立美術館



《写生帖（鯉）》より

大正9年（1920）
大分県立美術館



Fukuda Heihachiro 2024 Calendar

2024 カレンダー & 特別前売券セット

企画チケット

2024年を彩る展覧会オリジナルカレンダーを作りました。
季節感たっぷりのモチーフが部屋を明るく飾ります。
お得な特別前売券とのセットもご用意しました。



カレンダー
(完成イメージ)

図版：
《素描(紅白餅)》
昭和24年(1949)
大分県立美術館

〈価格〉

○カレンダー・特別前売券(一般観覧券)セット：2,800円(税込)

○カレンダー単体：1,500円(税込)

*ともに送料(別途)全国一律350円

〈仕様〉

上下見開きA4サイズ・壁掛け用・マンスリー(1月始まり)

〈販売期間〉

特別前売券セット：2023年10月10日[火]~12月3日[日]

カレンダー単体：2023年10月10日[火]~

*数量限定のため売り切れの次第、販売終了となります

〈カレンダーの発送〉

2023年12月中旬予定

*観覧券はオンラインチケットを発行します

〈販売場所〉

オンラインチケット(etix)

<https://www.e-tix.jp/fukudaheihachiro-2024/>

 Instagram
イベント
ご招待券プレゼント

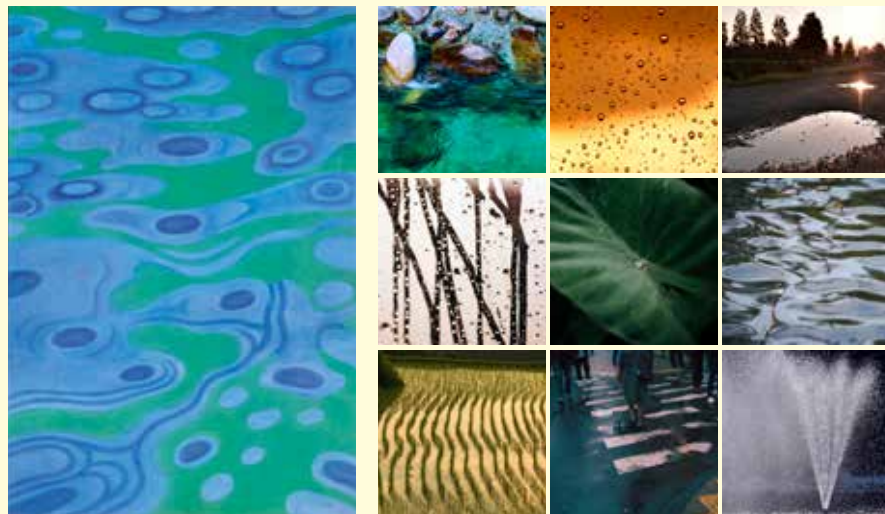
その絶妙なトリミングで写真との関連が指摘される平八郎。没後50年展の開催に合わせてフォトイベント「平八郎フォトグラフ」を実施します。

参加方法は毎月発表されるお題にちなんだ写真を撮ってInstagramにアップするだけです。抽選で本展の招待券をプレゼントします。

イベントの詳細は
本展公式Instagramアカウント
(@heihachiro50)
展覧会公式サイト
(<https://nakka-art.jp/exhibition-post/fukudaheihachiro-2023/>)
をご確認ください

Heihachiro Photograph

2023年
10月10日
スタート!



【開催概要】

展覧会名：没後50年 福田平八郎

会 期：2024年3月9日[土]～5月6日[月・休]

前期＝4月7日[日]まで

後期＝4月9日[火]から

*会期中に展示替えがあります

会 場：大阪中之島美術館 4階展示室

休 館 日：月曜日（ただし4月1日、4月15日、
4月22日、4月29日、5月6日は開館）

開場時間：10:00～18:00（入場は17:30まで）

観 覧 料：一 般＝1,800円(1,600円)

高大生＝1,000円(800円)

中学生以下＝無料

*障がい者手帳などをお持ちの方（介護者1名を含む）
は当日料金の半額（要証明）

*本展は大阪市内在住の65歳以上の方も一般料金が
必要です

主 催：大阪中之島美術館、毎日新聞社

協 賛：大和ハウス工業

【展覧会公式サイト】

[https://nakka-art.jp/exhibition-post/
fukudaheihachiro-2023/](https://nakka-art.jp/exhibition-post/fukudaheihachiro-2023/)



公式X(旧Twitter) @heihachiro50

公式Instagram @heihachiro50



大阪中之島美術館

OSAKA MUSEUM OF ART

〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-1

お問い合わせ：06-4301-7285

（大阪市総合コールセンター 年中無休 8:00-21:00）

報道に関するお問い合わせ

「没後50年 福田平八郎」

PR事務局（株式会社TMオフィス内）

担当：馬場・永井・西坂

電話：050-1807-2919

E-mail：heihachiro50@tm-office.co.jp

〒541-0046

大阪市中央区平野町4-7-7 平野町イシカワビル

巡回情報【大分会場】

大分県立美術館 5月18日[土]～7月15日[月・祝]

*本リリースは大阪会場の内容であり、大分会場では開催概要や出品作品が変更になる場合があります